

## 一、『三国志演義』版本の研究

### 1-1 『三国志演義』版本の研究

1998年、汲古書院より刊行。1993年、東北大学に提出した博士論文。

### 1-2 成果

- ・32種類の版本を取り上げて考察。
- ・嘉靖本から毛宗崗本成立までに数段階あること。
- ・1 2の挿入説話（関索以外は新発見）
- ・大きく三系統に分かれる。簡本系はさらに2つの小グループに分かれる。  
二十四卷系 二十卷繁本系 二十卷簡本系——志伝グループ・英雄志伝グループ
- ・各系統ごとの諸本の相互関係
- ・三系統の分岐の過程 簡本系は二十卷繁本系から派生した → 当時から疑問はあった
- ・六巻本の存在と特徴  
成立は康熙五年以降、英雄志伝グループの文章の冒頭部分を、二十四卷系を用いて書き換え
- ・系統図

1993年、あるいは1998年当時としては、最高水準。これで一段落のつもり。

### 1-3 進展 版本研究にとって、大きな出来事が発生

- 1、版本のデジタル化。周文業先生による版本比較プログラムの開発
- 2、前著執筆時に見られなかった（見つかっていなかった）資料を見ることができるようになった。  
科研費が使える、積極的な海外渡航、図書館など蔵書機関による画像データの公開

## 二、新発見資料一覧

### 2-1 存在が知られながら、前著で閲覧・調査できなかったもの（前著で取り上げている本と同版は除く。）

- 周日校乙本（イエール大学、北京大学）
  - ・上海図書館蔵残葉
  - ・英雄譜本（原本・筑波大学）
  - ・遺香堂本（イエール大学）
- 美玉堂本（アンナ・アマリア公爵夫人記念図書館。魏安氏、巻6～10のみと報告。実際は完本）

### 2-2 前著以降の新発見・新たに存在を知った資料

- (1) 二十四卷系
  - ・周日校甲本（中国社会科学院、朝鮮覆刻本）
  - 遺香堂原本（張青松）
- (2) 二十卷繁本系 なし
- (3)-1 簡本系「志伝系グループ」
  - 九大20巻本（九州大学）
  - 穎傑本（穎傑）
- (3)-2 簡本系「英雄志伝系グループ」
  - a, 純粹な『三国英雄志伝』
    - ・劉興我本（名古屋大学）
    - ・継志堂本（東京大学東洋文化研究所）
  - 張青松己本
  - 美玉堂本覆本（上海図書館）
  - 上海図書館蔵20巻残本
- b, 「先繁後簡」小グループ
  - ・鄭喬林本（ベルリン州立図書館）
  - 張青松甲本（嘉慶七年本と行款同じ、こちらが早い）
  - 張青松乙本（甲本と同版）

- ・嘉慶七年本（ハーバード大学、首都図書館？）
- 致和堂本（張青松）
- 張青松己本（20巻本）
- 尚徳堂本（6巻本・上海図書館）
- 張青松戊本（6巻本・上図尚徳堂本と同版）
- ・宝華楼本（6巻本・国家図書館）
- 大文堂本（6巻本・上海図書館）
- 三讓本（6巻本・張青松）
- 松盛堂本（6巻本の12巻化・遼寧図書館）
- c, どちらの小グループか不明
- 私蔵『三国英雄志伝』（20巻本、巻三のみ）
- 張青松丙本（20巻本、巻三のみ）
- 丁本（巻六～十のみ）

#### 2-3 同版版本を前著で取り上げているが、特に重要なもの

- ・葉逢春本（スイス、マルタン・ボドメール財団図書館、巻四第34葉表～第55葉裏まで存）  
スペイン本と同版。スイス本の残存部分が重複し、スペイン本の欠落部分がスイス本なのではない。印刷はスイス本の方が早い。ヨーロッパに少なくとも2種類の葉逢春本が伝わっていた。
- 勤有堂本（立正大学）  
天理図書館蔵本と同版。天理本では失われている序文・巻一第一葉あり。また天理本で欠葉部分が残存。これにより、万暦甲戌年（三十八年、西暦1610年）、羅端源勤有堂による刊行と判明。
- ・李卓吾先生批評三国志  
（台湾国家図書館・米沢図書館、九州大学・早稲田大学・南京図書館、都立中央・イエール大学）
- ・李卓吾先生批評三国志真本  
いわゆる「李卓吾本」は、大きく『李卓吾先生批評三国志』と『李卓吾先生批評三国志真本』に分かれる。『李卓吾先生批評三国志』は、甲本・乙本・丁本の三つの系統に分かれる。『真本』は、李卓吾本甲本の系統に近い本を底本として成立し、本文を読みやすく改め、さらに『真本』では独自の本文解釈をする。

### 三、新発見資料から見えてくること

ほとんどが簡本系で、英雄志伝系。中でも先繁後簡が多い。二十四巻系はなくはないが、少ない。二十巻繁本系はまったくない。  
清朝になって以降は、簡本系、特に英雄志伝系が数多く出版されていた。康熙五年以降（毛宗崗本成立以降）も同様。最も広く行き渡り、最も広く読まれたのは、英雄志伝系である。

### 四、新発見資料によって修正された見解

#### 4-1 「先繁後簡」についての従来の見解

「先繁後簡」は6巻本から始まり、康熙五年以降の成立。冒頭五則だけ二十四巻系を用い、後は英雄志伝系を用いた「龍頭蛇尾」本。安価ながら、いかにも由緒正しい『三国志演義』を装ってできた。

#### 4-2 『三国英雄志伝』についての研究

20巻の「先繁後簡」本が複数存在。鄭喬林本・致和堂本・嘉慶七年本。致和堂本は6巻本の底本と密接な関係がある。6巻本成立以前にすでに20巻の「先繁後簡」本が存在していた。「先繁後簡」は必ずしも6巻本に始まるものではない。

#### 4-3 『三国英雄志伝』の新問題

「先繁後簡」本に、より古い文章の形跡がある。特に鄭喬林本。「先繁後簡」本の成立は、かなり早い？（そう考えないと説明がつかない文章がある。しかし先繁後簡の明刊本は存在しない。）

簡本系版本の成立、「志伝グループ」と「英雄志伝グループ」の関係について、再検討の必要系統図修正の必要

### 五、最後に